



高齢馬への飼料給与 — ベテランパワー発揮のために —

馬の社会的な役割が、かつての労役や移動手段からコンパニオンアニマルやプレジャーホースあるいは療養馬などへと変化するにともなって、高齢馬が活躍する場も増加すると考えられます。また、おとなしい高齢馬を多頭数繋養している乗馬クラブもあることでしょう。そこで今回は、高齢馬の飼養管理について紹介いたします。

・高齢馬もいろいろ

「馬の年齢をヒトに換算すると?」と問いかけられた経験は、本誌の読者であれば誰もが思うと思います。さまざまな回答例があるでしょうが、一般的には、馬の6か月齢はヒトの6歳、12か月齢は12歳、2歳は18歳と同等、以後馬の1年はヒトの3年に相当しながら年齢を重ね、馬の20歳はヒトの60歳にあたとされています。ヒトで元気な60歳が大勢いるように、元気な20歳の馬も多くいることでしょう。こうした馬に特別な飼養管理方法が必要かどうかは、年齢ではなく加齢による臨床的な問題を抱えているかどうか、で決まります。もっとも多いのは歯、次に消化管に関する問題です。いずれも飼料の咀嚼から養分の吸収に影響を与えることから、これらを考慮した飼料給与が望まれます。

・問題がある高齢馬に適した飼料

歯に問題があると咀嚼が不十分となって口から飼料をこぼすことが多くなり、のど詰まりや疝痛のリスクも高まるとされています。さらに消化管の機能が劣ると糞中に未消化の穀粒や乾草の茎などの排出量が目立ってきます。こうした問題を抱えた高齢馬（ここでは老齢馬と定義します）に給与する飼料は、咀嚼を容易にするために水分を含ませ柔らかくする、乾草は葉が多く良質なものとす、1回あたりの給与量を少なくして1日分を4-5回以上に分けて与える、エクストルーダ処理（ペレット成型時に熱、水分、圧力を加えたのち大気中に放出することにより膨化させた多孔質な飼料で成型過程においてデンブンは消化しやすい糊状（アルファー化）されている、シニア用として流通している飼料にはこの処理が施されていることが多い）された飼料を利用する、穀類は圧ぺんや破碎などの加工を施す、などの対策が一般的です。

老齢馬は、タンパク質やリンの消化吸収機能が少し劣るとされているため、シニア用飼料のなかにはこうした栄養素の含有率がわずかながら高めになっているものもあります。しかし、過剰なタンパク質やミネラルの摂取は腎臓の負担を大きくさせるため注意が必要です。また、大腸の吸収機能が加齢の影響を受けやすいとの報

告もありますが、一方では若い時から定期的な駆虫履歴がある馬はそのような影響は少ない、ともされています。

・老齢馬に特有の代謝疾患

クッシングとも呼ばれる PPID（下垂体機能障害）は、下垂体と副腎との連絡系が異常となる内分泌疾患で、多毛症（長くカールした被毛を特徴とする）、飲水量と排尿量の増加、多汗症、無気力、筋肉減少、腹部膨満、不妊症、蹄葉炎などさまざまな臨床症状を示します。すべての馬の品種で発症が確認されており、平均発症年齢は19歳でその後加齢とともに発症率は高まる、また老齢馬の20%以上に発症している可能性があると考えられています。PPIDに類似する疾患であるEMS（ウマ代謝性疾患）は、比較的若い15歳以下のポニーや温血種に比較的多く発症し、肥満や脂質異常、重症例では蹄葉炎に進行します。PPIDでは血中の副腎皮質刺激ホルモン濃度が上昇するのに対し、EMSでのそれは正常であり、このことは類症鑑別手段のひとつとされています。また、PPID、EMSともIR（インスリン抵抗性、インスリン調節不全）を併発する可能性があります。IRはインスリンの感受性が低下することにより、血中グルコースの筋肉などの組織への取込みを減少させる疾患です。結果的にIR発症馬の血中のインスリン濃度は高くなり、上述のPPID同様の症状が認められるとのこと。こうした馬に推奨されている飼料給与方法は、デンブンを豊富な穀類の制限に加えNSC（非構造性炭水化物）やWSC（水溶性炭水化物）が低い牧草を給与する必要があるとされています（本記事7月号 Vol.12参照）。牧草に含まれるNSCやWSCは牧草給与前に30分（温水）から60分（冷水）間漬けておくことで相当量除去することができます。



PPID 発症馬

(https://en.wikipedia.org/wiki/Pituitary_pars_intermedia_dysfunction より引用)